ICT 使用とアタッチメントの関係性に関する文献検討

中塚　志麻

抄録

本稿では、これからの society5.0 時代に対応する保育や教育、そして子育てに役立つ資料を収集することを目的に、ICT とアタッチメントの関係について、文献検討を行った。選定の結果 、5 本の文献を分析対象とした。選出した３論文ではアタッチメントスタイル「不安型」はネット依存傾向にあるという結果となった。今後「不安型」の保護者の子育てにおいて、子どももアタッチメント形成不全やネット依存になる可能性が示唆された。また、面前スマホがアタッチメント形成に関連がある結果から、今後は子どもの発達段階とモバイルデバイス使用のメリットとデメリットを考えるメディアリテラシーやメディアに関するリスク教育を親子が共に学ぶ必要性が示唆された。今回の報告では、相関や多変量解析の結果、ICT 使用とアタッチメントの関係性についての関係性を示唆する結果が記述されていた。しかし、研究デザインや対象者が限定的であり、今後も研究の蓄積が期待される。

キーワード：ICT、アタッチメント、スマホ育児、マルトリートメント、

１．はじめに

Society5.0 と呼ばれる「超スマート社会」の到来により、AI（人工知能）やモノのインターネットとされる IoT などの高度な科学技術は、目まぐるしく発展している。今日の高度情報化社会は、我々の社会の在り方や生活に多大な影響を与えている。スマートフォン、タブレット、パーソナルコンピューターなどの ICT 機器は今や便利な情報ツールとして必需品となっている。このようにスマートフォンやタブレットの使用は、多くの親と子どもの生活に欠かせないものとなっており、あわせて子ども達の心と体の発達にも大きな影響を与えている。特にスマートフォン利用の低年齢化と長時間使用は喫緊の課題であり、実際に日本小児科医会は、2014 年に「スマホに子守りをさせないで」[1] というポスターを作成し、注意を喚起している。さらに現在は 1996 年から 2012 年頃までに生まれたスマホネイティブといわれる Z 世代が、子育てする時代となっている。スマホネイティブとは、世界最初のスマートフォン初代 iphone が 2007 年に発売されて以来、スマートフォンが普及されている環境で育った世代のことである。スマホネイティブがネイティブ２世を子育てするという社会においては、多くの課題があげられる。課題の１つは、養育者自身が ICT 機器に夢中になって子育てが疎かになり、結果的に不適切な養育となる「スマホネグレクト」の問題である。２つ目は「スマホ子育て」[2] という名前の通り、スマホやタブレットが子育てのツールとして利用されて、子どものスマホ利用低年齢化と長期使用の問題である。これら２つの課題は、双方ともに本来親子の相互作用によるアタッチメント形成に悪影響があるとの懸念がある[3][4]。

アタッチメントとは、子どもと特定の養育者との間に結ばれる情緒的な絆のことであり、母性剝奪研究を通してBowlbyが1960年代に「アタッチメント理論（愛着理論）」として提唱した概念である[5)]。その後、Ainsworthによって「安全基地」や「アタッチメントスタイル」等の概念を用いて構造化され、発展していった。アタッチメントは、人間の発達には重要な役割があり、安定したアタッチメント形成は人格形成の基盤となる。人は、アタッチメント対象となる特定の人と関わることで安全基地が形成され、この基地を通して、自分は他人から愛される価値があると思う自己信頼や他者を信頼してもよいのだという他者信頼が芽生える。これらは人が成長するための心の土台となるのである[5)]。

このように、人が成長していく上でアタッチメントが重要であることは、以前より認知されているが、ICTとアタッチメントの関連性のレビュ－に関しては多く報告されていない。国内ではレビュ－報告はなく、海外においては、Rebecca Hood[6)] らが文献レビュ－を行い、３本の論文を選出している。このレビュ－では、親子のモバイルデバイスの使用期間とアタッチメントに関連する構成要素の間に負の相関がある研究報告を提示している。しかしながら、これらの関連性は限定的であり、より明確なエビデンスが望まれると考察されている。

以上のことより、本稿では、本邦ではまだ報告されていないICTとアタッチメントの関係性に焦点をあてた文献レビュ－を行い、これからのsociety5.0時代に対応する保育や教育に役立つ資料を収集することを目的とした。

２．方法

本研究は、ナラティブレビュ－であるが、より妥当性のある論文を抽出するため、システマティックレビュ－およびメタアナリシスのガイドラインであるPRISMA 声明の原則に準拠し、実施した７）

（１）文献検索過程

学術情報データベースであるCiNii、J-STAGE、医中誌WEB、IRDBを用いて文献検索を行った。検索キーワード「ネット」「愛着」「アタッチメント」「スマホ」「スマートフォン」「ICT」の組み合わせを使用して、検索を行った。検索の期間は、アイフォンが発売された2007年以降とした。

（２）選考基準と除外基準

選考基準

・国内で実施された研究論文（英語論文含む）

・アタッチメントとICT利用に関する内容が具体的に記載されていること

除外基準

・非公開研究

・アタッチメント、ICTに関係のない文献

・文献レビュ－

・実践報告

・発表資料

・総説、書評、雑録等

・会議録

（３）文献の選択

文献選択の過程は、図１のフローチャートに示す。上述のデータベースにおいて検索キーワードにより検索された論文は 424 本であった。引用文献等から関連性のある論文を遡った文献３本（その他の情報源から追加した文献）を加えた計 427 本を第一段階として特定した。第二段階では、全てのタイトル・抄録を閲覧し、題名と抄録が目的と不一致の文献、重複文献 366 本を除外し、61 本を選択した。さらに、非公開研究、本文が目的と不一致の文献 45 本を除外した。第三段階では、適格性を評価した 16 本の文献を精読し、除外基準に相当する文献 11 本を除外した。最終的に適格性を満たした５本を採択する文献として決定した。（図１）

（４）倫理的配慮

本研究は文献研究のため該当しない。

（５）分析方法

採用文献に対してレビューシートを作成し、①著者名・掲載年 ②キーワード③対象 ④研究デザイン・研究方法 ⑤研究目的 ⑥考察 / 結果 の項目立てをして内容を整理した。（表１）

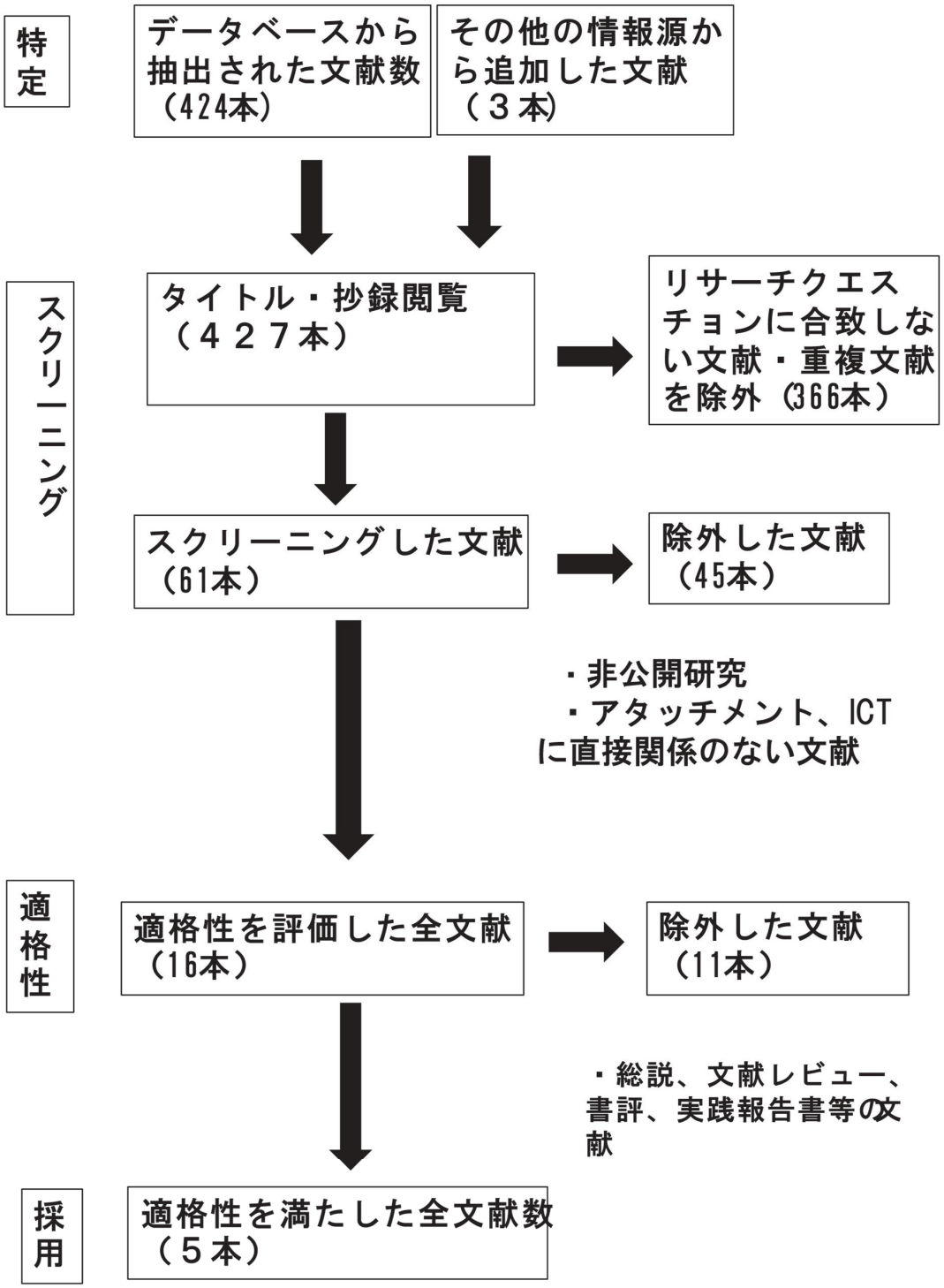

図１　対象文献選定のフローチャート

表１　各研究の概要

著者 年	キーワード	対象	研究方法 使用尺度	研究目的	結果/考察
2013年 宮本邦雄	愛着スタイル インターネット	東海地方の大学生及び専門学校生232名（男性89名　女性143名）	質問紙調査 友人関係尺度 友人ソーシャルサポート尺度 愛着スタイル尺度	青年期に愛着スタイルと友人関係の関連性を検討し、その結果がIT利用の多様性とどのように影響するのかを検討	重回帰分析の結果、愛着スタイルの「親密性の回避」は、IT利用の「情報収集」「交流」に抑制的影響を及ぼすことが示された。また、「見捨てられ不安」では、「傷つけられ回避」に強い正の影響を示し、「ソーシャルサポート」に負の影響を示した。ITを利用した交流においては、安定型ととらわれ型が拒絶回避型よりも高い得点を示した。
2019年 藤井壽夫	愛着スタイル ネット依存	H短期大学の学生248名（男性32名　女性216名）	質問紙調査 愛着スタイル診断テスト インターネット依存度テストI（IAT）	インターネット依存に焦点をあて、愛着スタイルの関連について検討	愛着スタイルとネット依存得点について分散分析、LSD法を用いた多重比較で分析。「安定型」がネット依存傾向が低くなっていることに対して、「安定-不安型」「不安型」はネット依存傾向が中程度という結果になった。また、「安定ー回避型」「回避型」「回避-安定型」の「回避型スコア高群」では、ネット依存得点が低い傾向が認められた。この結果に対して「回避型スコア高群」の学生は、SNSに対しても回避的傾向になると考察している。
2019年 川原正人	ネット依存 アタッチメントスタイル 回避　不安 2次元4分類モデル	大学生279名（男性65名　助成211名　不明3名）	質問紙調査 インターネット依存度テストI（IAT） アダルトアタッチメントスタイル尺度（ＥＣＲ-ＲＳ）	愛着スタイルがネット依存傾向にもたらす影響に関して検討	因子分析によって抽出された2因子の得点を独立変数に設定し、IAT得点を従属変数として重回帰分析を行った。回避からは負の影響、不安からは正の影響が確認された。回避と不安の次元によって4分類しけんとうしたところ、「とらわれ型」「恐れ型」「安定型」「拒絶型」の順にネット依存が高いことが確認された。
2019年 野口三奈生 山口一	アタッチメント 育児ストレス スマートフォン使用	関東地方の１保健所の3歳児健診受診した児の母親205名	質問紙調査 インターネット依存度テストI（IAT） 育児ストレッサー尺度 産褥期母親愛着尺度	「モバイルデバイス使用」「インターネット依存傾向」と「母親のストレス」「アタッチメント」との関連について検討	育児ストレッサー尺度の「子育て困難感」，「サポート不足」「育児知識と技術不足」「育児による拘束」の4 因子全てがインターネット依存得点と有意な弱い正の相関を示した。この結果から「育児ストレス」と「インターネット依存傾向」との関連性が示唆された。,母親の「子育て困難感」が子どもへのアタッチメント形成不全やインターネット依存傾向を導いている可能性を報告。
2022年 菊池一晴 相良順子	1・2歳児 保護者 保育者 愛着関係 モバイルデバイス	保育所、認定こども園の1歳児、2歳児クラスの保護者48名と同クラスの保育者8名	質問紙調査 SABCL Myrusukiらが開発した尺度	児の保護者のモバイルデバイスの使用を指標として、子どもと保護者間、子どもと保育士間のそれぞれのアタッチメント関係の関連性を検討	保護者のモバイルデバイスの使用時間と子どもとの愛着関係については関連性が認められなかった。しかし、子どもの面前でのモバイルデバイスの使用時間には、保護者評定による安全基地と負の関連があることが認められた。この結果から子どもの面前でのモバイルデバイスの使用は、子どもとの愛着関係に影響がある可能性が示唆された。保育者の質問紙調査では、保育者の安全基地と保護者のモバイルデバイス使用頻度に正の相関があった。保育者の認識では、モバイルデバイスの使用頻度が高い保護者の子どもは保育者に頻繁に安全基地として使用されることが示された。。

３．結果

（1） 今日の子育て環境による ICT 利用とアタッチメント

野口ら[8]は、「モバイルデバイス使用」「インターネット依存傾向」と「母親のストレス」「アタッチメント」との関連について報告している。対象者は、関東地方の１保健所の３　歳児健診受診した児の母親である。調査は質問紙を使用し、年齢や子どもとの接触時間、兄弟数、就園状況、母親の就労状況、子育てのサポート、母子それぞれのモバイル端末使用時間の項目を設定した。また、インターネット依存度テスト[9]産褥期母親愛着尺度[10]、育児ストレッサー尺度の尺度を使用し調査を実施した。結果においては、育児ストレッサー尺度の「子育て困難感」、「サポート不足」「育児知識と技術不足」「育児による拘束」の４　因子全てがインターネット依存得点と有意な弱い正の相関を示した。この結果から「育児ストレス」と「インターネット依存傾向」との関連性が示唆された。更に、共分散構造分析因果モデルにおける「育児ストレス」「アタッチメント」「インターネット依存」得点との関連では、「育児知識と技術不足」「サポート不足」によって「子育て困難感」が強まると、子どもへの不安の増加とともに子どもへの関心が減少し、インターネット依存傾向が強まるパス図の適合が良好になった。つまり、「育児知識と技術不足」、「サポート不足」から「子育て困難感」が生じ、母親の子どもへのアタッチメント形成不全やインターネット依存傾向を導いている可能性を報告している。

次に、菊池ら[11]は、保育所、認定こども園の１歳児、２歳児クラスの保護者と同クラスの保育者を対象とした研究を報告している。この報告は児の保護者のモバイルデバイスの使用を指標として、子どもと保護者間、子どもと保育士間のそれぞれのアタッチメント関係の関連性を検討することを目的とした研究である。この研究の愛着関係の評価では、アタッチメント行動の安定性の評価を目的として作成された SABCL[12]が使用されている。SABCL は、対象児と保護者あるいは保育者との意思疎通を評価する３因子「こころの理解」「非安全のアタッチメント」「安全基地」の３因子 12 項目で構成された尺度である。また、保護者のメディア接触の評価では、Myrusuki[13]らが開発した尺度を使用し、調査が実施された。まず、保護者 48 名に質問紙調査を行ったところ、保護者の１日あたりのモバイルデバイスの使用時間と子どもとの愛着関係については関連性が認められなかった。しかし、子どもの面前でのモバイルデバイスの使用時間には、保護者評定による安全基地（対象児との良好な関係性）と負の関連があることが認められた。この結果から子どもの面前でのモバイルデバイスの使用は、子どもとの愛着関係に影響がある可能性が示唆された。次に、保育者８名を対象に質問紙調査を行ったところ、保育者の安全基地と保護者のモバイルデバイス使用頻度に正の相関があり、保育者の認識では、モバイルデバイスの使用頻度が高い保護者の子どもは保育者を安全基地として頻繁に使用されることが示された。本来保育者は保護者の頻回なモバイルデバイス使用を問題と捉える傾向がある。菊池らの考察では、保育者がそのような家庭の子どもと積極的に関わることにより相互作用が発生したのではないかと記述している。

（２） 青年期のアタッチメントスタイルと ICT 利用について

宮本[14]は、青年期に愛着スタイルと友人関係の関連性を検討し、その結果が IT 利用の多様性とどのように影響するのかを検討した研究を報告している。青年期の愛着スタイルは、乳幼児期における愛着の個人差（安定型、回避型、アンビバレント型）に対応し、親密な対人関係の研究に取り上げられるようになっている。この報告では、「親密性の回避」と「見捨てられ不安」の２下位尺度からなる愛着スタイル尺度[15]の２元モデルを採用している。このモデルはさらに両次元を自己と他者（愛着対象）とポジティブネガティブの内的作業モデルと対応させ「安定型」「拒絶回避型」「とらわれ型」「対人恐怖的回避型」の４カテゴリーに分類される。

この研究では、大学生、専門学校生 232 名を対象とし、インターネット利用状況、インターネット活動、インターネット利用理由等の内容の質問紙と、友人関係尺度・友人ソーシャルサポート尺度、愛着スタイル尺度を使用して、調査を実施した。重回帰分析の結果、愛着スタイルの「親密性の回避」は、IT 利用の「情報収集」「交流」に直接抑制的影響を及ぼすことが示された。また、友人ソーシャルサポート尺度の「友人ソーシャルサポート」と友人関係尺度の「快活的関係」へ抑制的影響を及ぼしていた。一方、「見捨てられ不安」では、友人関係尺度の「傷つけられ回避」に強い正の影響を示し、「ソーシャルサポート」に負の影響を示した。また、「傷つけられ回避」は、IT 利用の理由の「交流」「娯楽」「情報」に促進的影響を示した。さらに「見捨てられ不安」は「ソーシャルサポート」に抑制的影響を示した。このことより、「見捨てられ不安」は友人から傷つけられることを回避する傾向を強め、交流や娯楽、情報を活動理由とする IT 利用を動機づけることとなったと示している。次に、フェイスブック等の IT を利用した交流においては、「安定型」と「とらわれ型」が「拒絶回避型」よりも高い得点を示していた。また、IT 利用の理由としての「交流」では、「安定型」「とらわれ型」、「恐怖回避型」は「拒絶回避型」より高い得点を示した。この結果について、宮本は「恐怖回避型」の青年は IT を通して「交流」を求めているが、実際に実現できていない状況ではないかと考察している。

インターネット依存に焦点をあて、愛着スタイルの関連について検討した研究として藤井[16]の報告がある。この研究では、大学生 246 名を対象に、Young によるネット依存尺度と愛着スタイル診断テストを用いて分析している。愛着スタイルとネット依存得点の分散分析、LSD 法を用いた多重比較の結果を詳細に検討すると「安定型」のネット依存傾向が低くなっていることに対して、「安定－不安型」「不安型」はネット依存傾向が中程度という結果になった。この結果に対して、藤井は「不安型スコア高群」がネット依存しやすい傾向にあると考察している。また、「安定－回避型」「回避型」「回避－安定型」の「回避型スコア高群」では、ネット依存得点が低い傾向が認められた。この結果に対して藤井は「回避型スコア高群」の学生は、ネット上で展開される SNS に対しても回避的傾向になった結果と考察している。

藤井の研究と同様に、川原[17]は愛着スタイルがネット依存傾向にもたらす影響に関して大学生 279 名を対象にした研究を報告している。調査を実施するにあたり、ネット依存傾向を測定す

るためのIAT[9]（Internet Addiction Test）邦訳版、ECR-RS（アダルト・アタッチメントスタイル尺度）の既存尺度を使用した。また、ECR-RSの9項目を最尤法プロマックス回転による因子分析の結果､｢回避｣｢不安｣の２因子が抽出された。この２因子の得点を独立変数に設定し、IATの合計得点を従属変数として重回帰分析を行ったところ、回避からは負の影響、不安からは正の影響が確認された。この結果に関して、川原は、親密な人間関係を避ける傾向にある者は、ネット上のやり取りに対しても過度にのめりこめない傾向にあると考察している。また、不安が高い者は、人間関係の逃避先としてネットに依存しやすい傾向にあると示した。さらに愛着スタイルの４タイプ「とらわれ型」「恐れ型」「安定型」「拒絶型」とネット依存傾向の分散分析を行ったところ、ネット依存傾向は、「とらわれ型」「恐れ型」「安定型」「拒絶型」の順に高いという結果になった。この結果においても、重回帰分析の結果同様に、不安が高い群である「とらわれ型」「恐れ型」においてネット依存傾向得点が高くなった。

４．考察

（１）今日の子育て環境によるICT利用とアタッチメント

今日のネット・スマホ社会が子どもの体と心にどのような影響を与えているのか、乳幼児のスマホ依存や保護者のスマホ育児の問題等懸念課題は多くあげられている。実際にWHOが発表した「子どもの身体活動、睡眠に関するガイドライン」[18]や日本小児科医会の緊急提言「スマホに子守りをさせないで」等各機関が、スマホ育児等に関して啓発を続けている。このようにICT利用とアタッチメントの問題に関する注意喚起は頻繁に継続してとりあげられているものの、実際の研究報告としては、まだ多くは発表されていない状況である。

その中でも、野口らの報告は、スマートフォンやタブレット等モバイルデバイス使用やインターネット依存傾向と「母親のストレス」「アタッチメント」との関連について調査した貴重な内容となる。野口らは、「子育て困難感」、「サポート不足」「育児知識と技術不足」「育児による拘束」の４　因子がインターネット依存得点と有意な正の相関を示したことを報告している。この結果から、「育児知識と技術不足」、「サポート不足」が「子育て困難感」が発生し、アタッチメント形成不全やインターネット依存傾向が生起される可能性を述べている。野口らは、子育て困難感解消のために育児知識や技術を教えることやサポートを増やすことが、アタッチメント形成不全やインターネット依存を予防につながると今後の課題として述べている。深刻な少子化問題に取り組む本邦では、2023年４月の子ども基本法　子ども家庭庁設立等子育て支援に関して､積極的な施策を実施している。今後も子育てを応援する施策が多く成立すると思われるが、引き続き質量的に高い支援を行い、養育者の子育てストレスが軽減される環境が望まれる。

菊池らの報告は児の保護者のモバイルデバイスの使用を指標として、子どもと保護者間、子どもと保育士間のそれぞれのアタッチメント関係の関連性を検討している。この報告では、保護者のモバイルデバイスの使用時間と子どもとのアタッチメントの関連性が認められなかった

が子どもの面前でのモバイルデバイスの使用時間には、安全基地と負の関連があることが認められた。この結果より子どもの目の前での保護者のモバイルデバイス使用がアタッチメントに影響がある可能性が示唆された。絵本「ママのスマホになりたい」[19] の中で、母親がスマホに夢中になり、自分のことを見てくれない子どもの気持ち描かれて話題になったことがある。この絵本の内容に対して、ネット上では賛否両論が繰り広げられ、子どもの面前での養育者のスマホ利用に大きな関心が寄せられた[20]。子育ての中でスマホやタブレットの利用は便利であり、ストレス解消の一助となっているだろう。モバイルデバイスの使用を絶対悪とするのではなく、面前スマホを控え、親子で共に ICT 教材を使用する環境であれば、アタッチメントの影響もそれほど高くはないのではないかと考える。さらに、菊池は保護者と保育者を比較して、アタッチメントとモバイルデバイスの関連を調査した。この結果において、保育者の認識では、モバイルデバイスの使用頻度が高い保護者の子どもは保育者を安全基地として使用されることが示唆された。この結果に対して菊池は対象児がすでに保護者とは異なる安全基地を保育者との間で形成されていると考察している。これは、モバイルデバイスの使用頻度が高くなることで、希薄になった親子の関連性を保育者との関わりが補完する形になっている可能性が伺われる。保護者のモバイルデバイス使用とアタッチメントの関連性は、まだ明確なエビデンスが報告されていない。

society5.0 時代に対応する保育・教育を考える場合、これらの関連性を鑑み、保育者による「育てなおし」という視点を加味する必要がある。

（2）青年期のアタッチメントスタイルと ICT 利用について

スマートフォン使用が日常的な環境で育ったスマホネイティブ（Z 世代）は、日本においては 1996 年から 2012 年頃までに生まれた世代のことを指している。本節で抽出した 3 論文では、研究実施期間から藤井、川原論文がスマホネイティブ世代を対象とした論文になる。スマホネイティブ世代のアタッチメントと ICT の関連を調べることは、今後のネイティブ 2 世のアタッチメントを考える上で重要な資料となる。

宮本は、ネイティブ世代ではないが大学生を対象に愛着スタイルと友人関係の関連性の検討とその結果における IT 利用の多様性について報告している。宮本の報告では、愛着スタイルの「親密性の回避」が、IT 利用の「情報収集」「交流」に抑制的影響を及ぼすことが示された。これは、「親密性の回避型」は、対面だけでなく、SNS に対しても交流に対して積極的な行動を控える傾向があることが伺われる。これは藤井の「回避型スコア高群」が「ネット依存得点」が低い、川原の親密な人間関係を避ける傾向のある者はネット上のやり取りに対しても角に乗り込めない傾向にあるという結果と同様の結果を示している。もともと「回避型」は脅威のある状況から距離を置き、サポートや援助を求めようとしない傾向があるとされており[21]、このような回避傾向は、ICT 利用でも同様であることが伺われる。これらのことから、「回避型」はネット依存にはなりにくいメリットもあるが、手軽と思われるメールや SNS でもサポートや援助を求めずと SOS を

発信できない状況にあることが考えられる。また、宮本は「不安型」に対して「見捨てられ不安」は友人から傷つけられることを回避し、交流、娯楽、情報を得ることがIT利用の動機づけとなると考察している。「不安型」に関しては藤井・川原の両報告においても、ネット依存しやすい傾向になることが示されており、3論文の見解は一致している。このように、「不安型」は現実の生活や人間関係の逃避先としてインターネットを利用し、依存傾向になる可能性があるとされることは他の研究でも報告されている[22)]。現在のネット依存予防プログラムは、心理学・医学・教育学領域で、従来の理論をネット依存の問題に適用しているのがほとんどである[23)]。乳児期と成人期の愛着の関係性については、縦断研究によりその愛着分類は68～75%の一致率が示されている[24)]。愛着は生涯を通して影響を及ぼす可能性があり、今後は、愛着への介入を内容とするプログラムを開発し、ネット依存の予防や改善に及ぼす効果を検討することが望まれる。

５．総合考察

スマホネイティブといわれるZ世代が、ネイティブ２世を子育てする今日において、子育てにおけるICTの活用課題を検討することは重要なことである。課題の１つは、養育者がネットに夢中になり子育てが疎かになる「スマホネグレクト」の問題である。Z世代の大学生を対象とした研究では、選出した３論文共に「不安型」はネット依存傾向にあるという結果となった。この結果は、宮本論文の保護者の育児不安、サポート不足が子育て困難感を導き、結果的にアタッチメント形成不全やインターネット依存傾向につながる報告と等しい結果となっている。これらの結果から「不安型」のネイティブがネイティブ２世を育てると、負の連鎖によりネイティブ２世もアタッチメント形成不全やネット依存になる可能性があり、今後検討する課題である。

今日では、国や行政が総力を挙げて子育て支援対策を掲げているが、society5.0 の時代を生きぬく世代へは、より緊密な支援の必要性が伺われる。society5.0の教育について、柳沼16）は、これからの時代に必要な健全な行動力を育成するために、道徳教育での道徳的資質・能力の包括的な育成、リラクゼーション法等の心理教育、共感力、回復力（レジリエンス）等を含む非認知能力の必要性を述べている。リラクゼーション法等の心理教育は、現在でも各学校で実施されているが、今後は「不安」に対応する心理教育的アプローチや非認知能力の育成が重要な役割になると考察した。

また、課題の２つ目は「スマホ子育て」の問題である。本稿で菊池論文の結果において、面前スマホがアタッチメント形成に関連があることから、親子で知育アプリの使用が望ましいと考察した。しかしながら、スマホ利用の低年齢化と長期使用の問題は顕在化しており、一概に親子スマホを推奨するものではない。今後は、子どもの発達段階とモバイルデバイス使用のメリットとデメリットを考えるメディアリテラシーやメディアに関するリスク教育を親子が共に学ぶ機会が必要と思われる。

今回のレビューでは、ICT使用とアタッチメントの関係性について、相関や多変量解析の結果、

その関係性を示唆する結果が記述されていた。しかし、研究デザインや対象者が限定的であり、今後は縦断研究等を実施し、より明確なエビデンスを示す必要がある。

引用・参考文献

１）日本小児科医会．https://www.jpa-web.org/dcms_media/other/smh_leaflet.pdf (2014)

２）宋美玄．「『スマホネグレクト』にならないために」e Yomiuri Shinbun. https:// yomidr.yomiuri.co.jp/article/20160628-OYTET50017/ (2016 年 8 月 1 日)

３）佐藤和夫．IT の功罪：電子メディアの子どもへの影響とその対応．小児保健研究 77 18-22 (2018)

４）青木智子、水國照充．ICT に対する養育者の態度と子どもへの影響．国際 ICT 利用研究学会論文誌 1(1)23-30 (2017)

５）遠藤利彦．アタッチメントがわかる本「愛着」が心の力を育む．講談社 (2022)

６）Rebecca Hood、Juliana Zabatiero、Stephen R Zubrick etal.The association of mobile touch screen device use with parent-child attachment: a systematic review. Ergonomics.Dec64(12) (2021)

７）木戸芳史.PRISMA システマティック・レビューおよびメタアナリシスの報告における望ましい報告項目．看護研究.53.34-39 (2020)

８）野口三奈生、山口一．母親と子どものモバイル端末使用と母親のインターネット依存傾向―子育てストレスとアタッチメントとの関連―．心理学研究、健康心理学専攻・臨床心理学専攻 10.32-43 (2020)

９）Young、K.S.CaughtintheNet:HowtorecognizethesignsofInternetaddiction and awinningstrategy for recovery.NewYork:JohnWile (1998)

10）Nagata、M etal Maternity blues and Attachment to children in mothers of full-term normal infants. Acta Psychiatrica Scandinavica.3. 209-217 (2000)

11）菊池一晴、相良順子．「子ども」に対する保護者と保育者の認識の違い－保護者のモバイルデバイスの使用と愛着評価に着目して、チャイルドサイエンス 24. 35-39 (2022)

12）青木豊．短縮版アタッチメント行動チェックリストの作成とその信頼性・妥当性の検討．研究助成論文集／明治安田こころの健康財団 編 (47)48-55(2011)

13）Sarah Myruski etal.Tiwary 12 Digital disruption? Maternal mobile device use is related to infant social-emotional functioning.21 (4) e12610. (2017)

14）宮本邦雄．青年の愛着スタイルが友人関係とインターネット利用に及ぼす影響．東海学院大学紀要 (7)185-192 (2013)

15）Barth Bartholomew、K Avoidance of intimacy: An attachment perspective. Journal of Social and Personal Relationships、(7) 147-178 (1990)

16) 藤井壽夫．本学学生におけるネット依存傾向と愛着スタイルとの関連について． 函館短期大学紀要 (46)23-32 (2019)

17) 川原正人．アタッチメント・スタイルがネット依存傾向にもたらす影響． 東京未来大学研究紀要 13(0) 45-53(2019)

18)WHO. 子どもの身体活動、睡眠に関するガイドライン．
https://japan-who.or.jp/news-report/physical-activity-sedentary-behaviour-and-sleep/ (2019 年 4 月 25 日)

19) のぶみ．ママのスマホになりたい．WABE 出版 (2016)

20) エキサイトニュース (2018 年 2 月 10 日) https://www.excite.co.jp/news/article/Cyzowoman_201802_post_172954/)

21) Mikulincer Mario、Florian Victor.The relationship between adult ttachment styles and emotional and cognitive reactions to stressful events. In J.A. Simpson & W.S. Rholes (Eds.)、Attachment theory and close elationships.143-165.The Guilford Press(1998)

22) 井合真海子、矢澤美香子、根建金男．見捨てられスキーマが境界性パーソナリティ周辺群の徴候に及ぼす影響．パーソナリティ研究 19(2)81-93(2010)

23) 大井妙子．青年期を対象とした「インターネット依存」予防プログラムの文献レビュー．健康科学(45) 1-8(2023)

24) George、C.etal. Adult Attachment Interview. Unpublished manuscript、Development of psychology.Berkeley、CA: University of California. (1985)

25) 柳沼良太．学びと生き方を統合する Society5.0 の教育．図書文化社 (2020)
iuri.co.jp/article/20160628-OYTET50017/).